

17世紀スペインにおける「キリスト横臥像」の発展とその用法をめぐって グレゴリオ・フェルナンデスの作品を中心に

松原 典子（上智大学）

バロック期のスペインでは彩飾木彫という伝統的なジャンルにおいて、全身に傷を負った凄惨なキリスト像が盛んに制作された。「キリスト横臥像（Cristo yacente）」もその典型的主題のひとつである。北部バリャドリッドを中心に活躍した彫刻家グレゴリオ・フェルナンデス（1576-1636年）は特に、生涯にわたり十数点にのぼる「キリスト横臥像」を制作し、後世に長く継承されていく図像の基本型を作り出したことによって、この主題と分かちがたく結びついている。十字架から降ろされ、聖骸布の上に横たえられたそれらのキリスト像は、脇腹と手足から流れ出る生々しい血の描写や壮絶な苦悶を留めた表情など、目を覆いたくなるほど痛ましい姿ながら、同時に神聖なる崇高さを湛えて、今日まで大いなる崇敬を集めてきた。

「キリスト横臥像」がフェルナンデス以前にも制作されていたことは、少ないながらも現存する作例によって確認される。またバリャドリッドで16世紀に活躍したファン・デ・フニの作品が示すように、「埋葬」や「哀悼」の場面でキリストが他の人物から切り離され、地面や聖骸布の上に横たえられて表されることもあった。しかし「キリスト横臥像」がそれ自体で礼拝像として確立され流布するのはフェルナンデスの時代であり、その発展にはハプスブルク王家の人々とその周囲の貴族が関与していたと考えられる。本発表ではまず、バリャドリッドのサン・パブロ修道院所蔵作をはじめとするフェルナンデス最初期の「キリスト横臥像」数点について注文主や制作事情を検証し、それらの背景として当時の宮廷に「キリストの身体＝聖体」への強い崇敬が存在したこと、ひいてはその聖体崇敬が「キリスト横臥像」の広まりに寄与したことを明示したい。それに際しては、16世紀の作例のひとつで、王家の女性の主導で制作されたことがほぼ確実なマドリッドのデスカルス・レアレス修道院の作品（ガスパール・ベセーラに帰属）も合わせて検討する。

「キリスト横臥像」はそれが単なる礼拝像に留まらず、聖週間や聖体祭といった特定の機会に「キリストの身体＝聖体」の直接的表現としての性格を強め、儀式の場において用途を与えられたという点で、受難に関わる他の主題にはない特異性を有している。デスカルス・レアレス修道院やサン・パブロ修道院の作品は、脇腹の傷口が聖体容器としても仕立てられており、文献からは聖木曜日や聖金曜日の儀式に用いられたことがわかっている。また聖体容器の機能を備えていなくとも、完全な丸彫りで背中中の傷までもが丹念に表されたフェルナンデスの別の作品（バリャドリッド、サン・ミゲル聖堂）は、異なる方式で同様の儀式に用いられたものと想像される。本発表ではこうした「キリスト横臥像」を伴う儀式のあり方についても考察し、17世紀のスペインにおける聖像とその用法という問題の一端を明らかにしたい。